

高松宮妃喜久子殿下所用ビーズドレスについて

長佐古 美奈子

はじめに

当館では平成一九年に卒業生の武井絢子氏から寄贈を受けた高松宮妃喜久子殿下所用のビーズドレスを所蔵している。

武井氏の祖母小山トミ氏は昭和五年（一九三〇）から昭和一七年（一九四二）まで高松宮家の老女を務めていた¹。ドレスは昭和一七年の小山氏退官の際に、喜久子妃殿下から拝領したものである。

小山家では高松宮両殿下が昭和五年（一九三〇）～六年（一九三一）のヨーロッパ外遊の際に「おそらくパリで誂えたドレス」と伝えられ、拝領物として大切に扱い、第二次世界大戦中も行李数箱しか送れなかった疎開の荷物に入れたことでドレスは焼失を免れることができた。しかし、行李内保管の間に銀糸で織られたアンダードレスが黒く変色してしまった。戦後、そのアンダードレスを取り除いたが、その折にアンダードレスは失われた、とのことである。

ドレスはシルクジョーゼット地にビーズで青海波と百合のような花の日本的な刺繍が施され、ラインストーンで縁取りされた、大変美しいものである。（口絵3）

しかし、アンダードレスをはがしたために原状が失われ、上身頃と二枚のスカート状のもの三部分にわかれ、もとの形状がわからない状態であった。また生地痛みも激しく、刺繍されているビーズもはずれてしまう状況となっていた。

平成一九年度の特展「新収資料 高松宮家展²」において陳列展示した後、保存のために修復をおこなった。修復についての詳しい報告は田中淑江氏の報告³に委ね、ここでは、この喜久子妃殿下所用ビーズドレス（以下ビーズドレス）の来歴と復元についての調査報告をおこなう。

一、高松宮両殿下の渡欧米外遊について

高松宮宣仁親王殿下と喜久子妃殿下は昭和五年（一九三〇）二月四日に成婚式をあげ、その約二ヵ月後の四月二日「天皇の名代 高松宮両殿下」として横浜港より日本郵船鹿島丸に乗船し、イギリス、スペインへの公式訪問を含めた、欧米二四カ国一四ヶ月間（四一七日）の大旅行に出発した。

昭和四年五月英国皇帝第三皇子グロスター公が英国皇帝陛下から天皇陛下へのガーター勲章贈呈のために来日した。その答礼使として差遣されたのが昭和天皇弟宮の高松宮殿下であった。

イギリスとスペインへの公式訪問の他、ドイツ、フランス、イタリアなど西欧の主な国々をほとんど訪問し、さらにアメリカまで足を伸ばし、各国の王室はじめ首脳や政財界人との懇談、軍関係施設、文化慈善事業などを視察し、またその地の人々とも親しく交歓するといった旅行内容であった。

随行員は宮内省から山縣武夫式部官ら四名、高松宮家からは東京帝国大学坂本恒雄医学博士、前イタリア大使夫人落合たか、侍女山木だけが選ばれた。また、貞明皇后のお取り計らいにより高松宮殿下兄宮の秩父宮妃勢津子殿下母である松平信子駐英大使夫人などが旅行準備の相談係として喜

久子妃殿下に付けられた。

日本を出発の後、四二日間に渡る長い航海を経て、昭和五年（一九三〇）六月二日にマルセイユに到着、ここからパリに向かい、ホテル・ド・クリヨンと宿泊地地に各日エリーゼ宮、ルーブル博物館、ノートルダム寺院、ベルサイユ宮殿などを見物した。この間にイギリスから松平信子駐英大使夫人が来仏、英王室のしきたりなどを教授した。

同年六月二五日英国へ到着した高松宮同妃両殿下は、翌二六日に英国皇帝皇后へ天皇陛下の御沙汰を伝え、今回の訪問の最も重要な儀式を終えた。

その後ヨーロッパ諸国訪問、一月三日からのスペイン公式訪問、さらに昭和六年四月アメリカ、カナダへ向い、五月二八日秩父丸に乗船し、ハワイを経由し帰国の途につき、再び日本に戻ったのは昭和六年（一九三二）六月一日であった。

二. ドレスなどの御買物について

この公式訪問の旅費経費は『高松宮日記』⁽⁸⁾によれば宮内省二〇万円、高松宮家一〇万円の計三〇万円であった。旅程は宮内省、外務省が作成し、現地でのホテル、鉄道、車両手配などは「トマス・クック」社が行ったという。⁽⁹⁾

この支度金以外に喜久子妃殿下が外遊中に衣装を発注する費用として、高松宮家で二二、一七〇円が用意された。

喜久子妃殿下外遊用のドレスなどに関する記述を以下資料、参考文献からみてみる。

『高松宮日記』⁽⁷⁾には

六月二日 日曜 晴

六・三〇におきる。

とてもつまらない。外出する気にもならず海岸を十分間ばかりブラついて、皇后様のお散歩を遠くから眺めた。

午後本をよんで、いねむり。待屈の一日をおくる。

石川から結婚や外遊の準備の女の着物の調べをよこす。徳川家で結婚用に六〇、四四九円、此方で外遊用に欧州に行つてから買ふのも加へて二二、一七〇円。それで洋装だけ。女とは買ふものなり。買はれるものに非ずか。

渡欧の際に随行した侍女山木たけの日記をもとに書かれた『高松宮同妃両殿下のグランド・ハネムーン』⁽⁸⁾によれば、「昭和四年」一月六日徳川邸でドレスのフィッティングが始まった。婚礼用のフォーマルドレスと旅行用のドレスが中心で、「日本橋三越」「松屋」から縫製係が参上した。貞明皇后に任命された大使夫人らがアドバイザーをし、下着、毛皮、帽子、手袋、靴などは、当時、欧米の最先端ファッションが注文できた横浜の元町と弁天通りの専門店、帝国ホテルで開かれた洋装内覧会などから揃えたようだ。ジュエリー類のオーダー先としては銀座「ミキモト」の名が日記に出てくる。⁽⁹⁾とある。『高松宮日記』にも高松宮止装その他のものを「三越」へ注文、との記事がある。

日本で各種服装を取り揃え、前述のとおり高松宮同妃両殿下は昭和五年五月二一日、横浜港から出航した。同年六月二日にマルセイユに到着、その翌日にパリに入った。この最初のパリ到着から翌年三月一八日の最後のパリ出立まで、両殿下はパリを拠点にヨーロッパ各地を訪問した。この間、パリなどでいくつかのドレスを眺めたと思われる。

「高松宮宣仁親王」伝記刊行委員会編『高松宮宣仁親王』⁽¹⁰⁾には「六月）二一日またパリへ帰り、先のパリ滞在中に仕立てたお洋服の試着やお買い物などされ」とあり、パリで洋服を仕立てたことが記されている。

しかし、直接的にパリのどの店、どのデザイナーにドレスを発注したかはわからない。

表1は昭和一〇年（一九三五）六月一日に高松宮家より出版された外遊の公式記録『高松宮同妃両殿下御外遊日誌』⁽¹¹⁾より抽出した服装、買い物についての記事である。これによれば、主にパリで買物をしたようであるが、店名、買物内容は不明である。

1930	6	5	パリ	午前御服装に関する御用にてホテルに在らせらる
1930	6	23	パリ	英国御訪問の御準備として、御服の御試着御買物等の事あり
1930	6	24	パリ	妃殿下は御買物の為落合御用取扱を従へて御先に御帰途
1930	7	16	パリ	午後は両殿下御買物
1930	7	23	パリ	午後両殿下家具其の他の御買物
1930	8	2	ヴリュッセル	此の地の名産たるレース其の他の御買物に御成
1930	8	8	ハーグ	御買物
1931	3	6	パリ	午後御買物
1931	3	9	パリ	午後2時より両殿下御買物
1931	3	13	パリ	午前も午後も両殿下御別々に御買物

表1 御買物など記録

喜久子妃殿下自身もその著書『菊と葵のものがたり』において、ドレスについて言及している。

生まれて初めてパリに到着したのは、昭和五年（一九三〇）

の六月、ホテルはコンコルド広場に面するオテル・ド・クリヨンであった。（中略）ここに泊って私は、英国公式訪問の際ロンドンで着る洋服の仮縫いや、買物や、美味しいものを食べることに精出した。（中略）三年後、私の母が亡くなって、遺品の整理をしていたら、宮様がパリから母あてにお出しになった御手紙が出て来た。私のことを面白おかしく、からかい半分お書きになった御手紙なので、ここに引用して置こう。「その後、益々御元気の御様子で結構に存じます。こちらも皆丈夫すぎる位、この模様なら一年無事に

それが唯一のお楽しみなのですが、できれば日曜が度々あるとよいと考えます。どの店も日曜日は閉まってしまいますから。目下はロンドンから、新しいおべべが出来てくるのをお待ちかねで、スイスの景色などちつとも目にとまらなかつたのではないかと思います。（注：私の主な衣装はパリで仮縫いし、ロンドンで本縫いさせていた）（後略）

六月二二日 パリにて 宣仁

外交官であり、外交評論家として著名な加瀬俊一は外遊の時に外務官補としてベルリンに赴任しており、喜久子妃殿下よりドレスの買物を頼まれたという。そのときの回想によれば妃殿下はベルリンでもドレスの御買物をしている。

妃殿下はウンターデンリンデンの高級ブティックの前で足を止め、「ちよつとここに入るわ」「これが気に入ったわ」「ちよつと直してくれ、パリで着たい」と。時間はもういくらも残ってない。店主とけんか腰で「カネに糸目はつけない」と交渉して、汽車が発車するまでに仕立て直させる約束を取り付けたものの、心配で、「駄目だったらどうしよう」って。翌日、何はともあれ駆けつけたら、できてる。いよいよ発車まであと何時間という時に、それを抱えて、ステーションに行きますとね、各国の大使がね、大勢きているんですよ。で、私は妃殿下がお買い上げになったイブニングドレスの箱を小脇に抱えて、「ごめんください、ごめんください」ってかきわけて。両殿下の乗ってらっしゃる車両に飛び乗って、「妃殿下、やーつと間に合わせました」って。そしたら妃殿下、にこつとお笑いになってね、殿下のほうはなんで騒いでいるんだって顔をしてらっしゃる。

（以上傍線は筆者による）

帰れそうですが、先の事はどうもわかり兼ねます。（中略）寝つきは悪うございますが、朝はほつとけば何時までも……たり、それで自動車に乗れば、景色も凸凹道ありません。尤もスイスは仏国も道路はよろしすぎて、あまりドスンボタンしません。パリはやはりお買物の都らしく、

このように、長い外遊の間、日本で誂えた洋服を持っていく以外にも現地で各種洋服を誂えたり、買い求めていたことが確認できる。

しかし、このビーズドレスがいつ、どこで製作・購入されたものかは記録上で同定することはできなかった。

三、ドレスの復元調査

平成一九年に寄贈を受けた際、ビーズドレスは、上身頃と二枚のスカート状のもの、の三部分にわかれていた。総ビーズ刺繍であるため、加重がかかり、シルクジョーゼット地は裂け、ビーズ留糸も切れ切れになって、触れる度にビーズが剥落する状態であった。特別展における陳列も三部分を「適宜」合わせ、平置きする状態で展示陳列した。(図2)

展示終了後、共立女子大学教授長崎巖先生に相談し、ビーズドレスの修復ができる場所として河村まち子先生主宰のK染織修復研究所の紹介を受け、河村先生、田中淑江氏に修復を依頼した。

修復の最終形としては、ビーズドレスを原型に戻す必要がある。しかし、大掛かりなプロジェクトを組まない限り修復途上で、復元案を調査することは難しい⁽¹⁵⁾。そこで、修復は修復以前と同じ状況である上身頃と二枚のスカート状のもの⁽¹⁶⁾の三部分別々に行い、その後もとの形状の調査を行った。

(口絵4~11参照)

修復されたビーズドレスの形状復元調査については、京都服飾文化研究財団(KCI)の深井晃子先生に助言をいただいた。

ビーズドレスの原型を調査する中で、平成二一年(二〇〇九)に京都国立近代美術館・東京都現代美術館で開催された『ラグジュアリー ファッションの欲望⁽¹⁶⁾』の図録中にビーズドレスと模様が似ているもの(図3)を発見した。そこで、同展

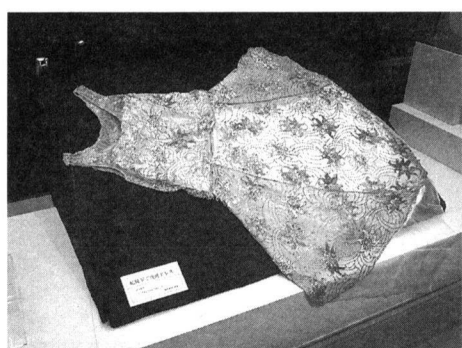


図2 特別展における展示状態



図3 シャネル イブニングドレス 1937頃

の企画・主催をした京都服飾文化研究財団(KCI)の深井先生にビーズドレスを実見していただき、ビーズドレスの原型を模索する作業を行った。復元作業はまずスカート状のものが何であるのか、を考えた。

スカート状のもの⁽¹⁷⁾のウエスト寸法は、スカートI 三九、五cm、スカートII 四九cmである。喜久子妃殿下の身長は一六二cm程あり、当時どんなに痩せていたとしても、いずれも単独では胴全体に回すことはできない。

しかし、スカート状のもの一枚に他の布を補う形にすれば、一枚のみスカートとして使用することも不可能ではない。スカートに使用しなかった残りの一枚については、例えばショールのような形で肩に掛ける可能性もある。しかし、スカートIを肩にかけると長くなり(長さ八四、五cm)、しかも長時間の着用には耐え難いほど重い(重さ七八八g)。スカートIIについては、ショールとしてはスリットが不自然である(スリット深長六二、五cm)。

スカート状のものをスカートとして使用するためには、図3シャネルドレスのようにアンダードレスもしくは裏地の存在が不可欠と考えられる。しかし、アンダードレスの存在はわかっているものの、現状では失われてしまっており、状況が不明である。

そこで、寄贈者の武井氏に再度、聞き取り調査をおこなった。武井氏の記憶では当初より裏地はついておらず、ドレスは上身頃とスカート部分

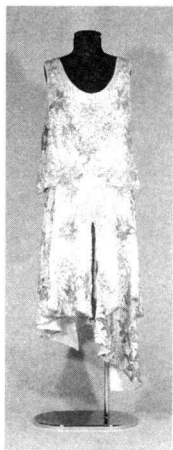
の二パーツにわかれていた。取り去ってしまったアンダードレスはキャミソールのような形（でも肩ひもはない）をしており、そのアンダードレスの下部にスカート部分が縫いつけられていた。アンダードレスの襟ぐりはビーズドレスと同じ形をしており、アンダードレスには銀糸が織り込まれていたが、やわらかい生地であった。とのことであった。

四. ドレスの復元研究

聞き取り調査の結果から、スカートI、IIともアンダードレスに縫いつけられていたことが判明した。このような形で使用する場合どのような組み合わせが考えられるか。考えられるパターンを実験してみた。

パターン一

スカート一 下 たれ横
スカート二 上 スリット前



パターン二

スカート一 下 たれ後
スカート二 上 スリット横（斜め横）

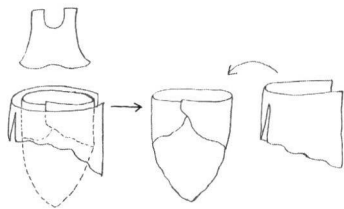


図5

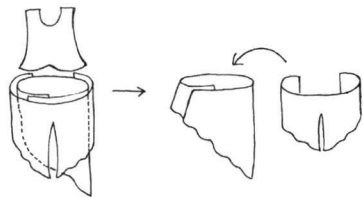


図4

パターン三

スカート一 下 たれ前
スカート二 上 スリット横



パターン四

スカート一 上 たれ横
スカート二 下 スリット横



パターン五

スカート一 下 たれ横
スカート二 上 スリット横

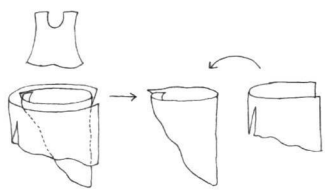


図8

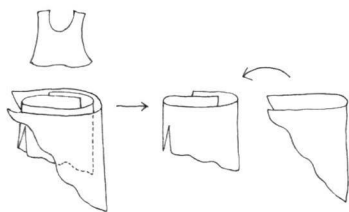


図7

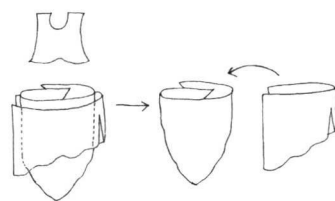


図6

事前に平面上で試行した際には、パターン一が完成形と考えたが、ボディに装着し立体的なラインを出してみると、パターン五がもっとも美しいドレープラインを出すことがわかった。

武井氏聞き取り調査とこの結果から、深井先生より以下の指摘をいただいた。

○アンダードレスにスカートが縫いつけられており、そのアンダードレスの素材が、銀糸が織り込まれていたもの、ということとは恐らく銀ラメかと推測できるが、これはドレスとコーディネートされていた当時の流行のドレスの例として極めて妥当なものである。

○とすれば、このような見えても良い素材のアンダードレスは、スカートの深いスリットから見えても良い見せるような形状だった可能性もあり得る。このことにより、スリットの深さに納得が得られる。そのような例は、存在している。また、そうであれば、脚は露出されないことになる。

○とすれば、現在のスカート二枚の組み合わせ方以外の、異なる組み合わせ方も可能になる。

とのことであり、最終的な結論には至れない、という結果となった。

一方、修復にあたった田中氏は当時のドレスの流行パターンから、ヴィオネ風のデザイン性があることを指摘している。マドレーネ・ヴィオネは一九二〇～三〇年代に活躍したバイアスカットの創始者として知られるデザイナーである。このスカートも田中氏の指摘どおりバイアスカットされており、パターン五の着装では流れるような立体的なラインが現れる。ヴィオネが何よりも表現したいと考えていたものは「ギリシヤの衣服に見られる「ムーブメント」や日本のキモノの「流れるようなライン」だった。キモノは、左肩が高く、右側は低くなっている。あらゆるものが左に集中し、そこから右に流れている。「ジャポニカ」Japonicaと題された一九二四年の作品スケッチは、キモノに対するヴィオネの最終的な解釈¹⁸⁾であると言われており、このビーズドレスの形、また日本的な青海波と百合模様との

共通性もみてとれる。

もっとも喜久子妃のドレスを製作できる格のメゾン、と考えると当時のパリでは、ウォルト¹⁹⁾、パキヤン²⁰⁾、ランバン²¹⁾などが王室、貴族のドレスメーカーであり、ヴィオネは、革新的作風が特徴であり、貴族の女性でも個人的な人が顧客であった²²⁾。このことから、ヴィオネのメゾンで製作された可能性は低いかもしれない。

おわりに

以上、高松宮妃殿下所用ビーズドレスの来歴と復元について報告した。来歴については高松宮家の経済史料、例えば発注書、領収書などが発見できれば、解明することが可能であろう。しかし、高松宮家が廃絶となって五年余り、八〇年前のこの記録がみつかる可能性は低い。

一方ドレスの形状復元についてもアンダードレスが紛失されて久しいことから、かなり困難であると思われる。しかし、当時の流行の形からいくつかの形を模索し、現在考えうるもつとも元の形に近いものを提示することが出来たように思う。

この他、調査の途上では絹織物の産地を同定できれば、つまり蚕が日本



図9 ヴィオネ「ジャポニカ」

産か欧州産かがわかれば、製作地を特定することができるのではないかと、の深井先生からの助言により、蚕のDNA検査が可能かも調査した。独立行政法人農業生物資源研究所生活資材開発ユニット高林千幸氏に話を伺ったところ、現状では蚕のDNA検査を行ったことがないので、無理であるとのことであった。もともと一九三〇年当時の最高級生糸は日本産であったはずであり、たとえ欧州で織られた生地でも、生糸は日本産を輸入したものが使用された可能性が高いであろう。

当時のオートクチュールドレスを製作するには、何度も仮縫いをおこない、完成までに相当の時間を費やしたことを考えると、多忙である渡欧中にドレスを一から仕立てるのは、難しいことと思われる。妃殿下自身もその著のなかで「私の主な衣装はパリで仮縫いし、ロンドンで本縫いさせていた」と述べており、また渡欧前にはドレスのフィッティングが行われ、下着、毛皮、帽子、手袋、靴などの発注がなされている。それは「当時、欧米の最先端ファッションが注文できた横浜の元町と弁天通りの専門店、帝国ホテルで開かれた洋装内覧会などから揃えたようだ。」ことであった。

三章において、このビーズドレスがヴィオネのドレスに似ている点を指摘したが、メゾンの格、作風の年代推移から、おそらくヴィオネ作ではないと考えられる。しかし、ヴィオネの作品が掲載されたファッション雑誌、例えば田中氏報告にある『フェミナ』などを横浜元町の専門店より取り寄せ、そこから参照した、ある程度のデザインと高松宮妃殿下のサイズをあらかじめロンドンカパリに伝え、現地にて仮縫い、本縫いをおこない完成させていたと考えることはできないのではないかと。

そのように考えれば、当時の最先端の流行との時間差、そして何より日本的な青海波と百合の模様で説明がつくのではないかと。

まだ結論には至らず、ドレスの復元形も他の形が考えられるかもしれない。今後さらさらに来歴の調査を行い、復元を模索したい。そしてこの美しいビーズドレスが長く保存されるよう、努力をしていきたいと思っている。

この稿をまとめるにあたり、多くの方からご指導、ご協力を賜りました。

記して感謝申し上げます。(敬称略)

京都服飾文化研究財団(KCI) 深井晃子・周防珠実
K染織修復研究所 河村まち子・田中淑江

高松宮妃癌研究基金 佐藤進

独立行政法人農業生物資源研究所生活資材開発ユニット 高林千幸
作画協力 本多葵美子

武井絢子 岡田茂弘 恩田裕子 高橋亜弥子 長崎巖

注

(1) 明治末年には、皇孫御殿にて裕仁親王・雍仁親王・宣仁親王の侍女を務めていた。

(2) 平成一九年(二〇〇七)四月七日〜六月九日開催

(3) 本紀要二二七〜一五三ページ参照

(4) ガーター勲章(The Order of the Garter, KG)は、一三四年にエドワード三世によって創始されたイングランドの最高勲章。

(5) 高松宮宣仁親王『高松宮日記』(中央公論社、一九九六年)昭和四年九月二三日の予記欄記載。

(6) 平野久美子『高松宮同妃両殿下のグランド・ハネムーン』(中央公論新社、二〇〇四年)

(7) 注(5)に同じ。昭和四年六月二日日記

(8) 注(6)に同じ。

(9) 注(5)に同じ。昭和四年二月七日日記

(10) 『高松宮宣仁親王』伝記刊行委員会編『高松宮宣仁親王』(朝日新聞社、一九九一年)

(11) 『高松宮同妃両殿下御外遊日誌』(高松宮、一九三五年)

(12) 高松宮妃喜久子『菊と葵のものがたり』(中央公論新社、一九九八年)

- (13) 加瀬俊一 外交官。第二次世界大戦前後に活躍し、国際連合加盟後初の国連大使や外務省顧問、内閣総理大臣顧問などを歴任。
- (14) 『週刊朝日』朝日新聞社、六、一八号、二〇〇四年
- (15) 杉野服飾大学では平成一九年度〜二二年度の私立大学学術研究高度化推進事業オープリンリサーチセンター研究（研究費総額三四、九〇〇、〇〇〇円）として「現代衣裳の原点を探る ウォルト作品の復元」を行っている。
- (16) 企画監修 深井晃子 『ラグジュアリー…ファッションの欲望』（京都服飾文化研究財団、二〇〇九年）
- (17) 高松宮妃癌研究基金理事岩崎藤子氏の談による。
- (18) ベティ・カーク著 東海晴美編『MONNET』（求龍堂、一九九一年）
- (19) シャルル・フレデリック・ウォルト オートクチュールのシステムを作った。昭憲皇太后のドレスを制作している。
- (20) ジャンヌ・バギャン 一八九一年にメゾン開設。顧客には英国王室、スペイン王室があり、二〇世紀前半ではパリで最も有名な店の一つであった。
- (21) ジャンヌ・ランバンが一八九九年に創設したブランド。
- (22) 深井先生の指摘より。
- (23) 注(10)に同じ。
- (24) 注(6)に同じ。



口絵3 高松宮妃喜久子殿下所用ビーズドレス着装例

〈修理前〉



口絵 4 修理前 前身頃

〈修理後〉



口絵 5 修理後 前身頃



口絵 6 修理前 後身頃



口絵 7 修理後 後身頃



口絵 8 修理前 スカート I



口絵 9 修理後 スカート I



口絵 10 修理前 スカート II



口絵 11 修理後 スカート II